

文芸

俳句

春耕や豪快に食ぶにぎり飯
 春耕しゅんこうや豪快たに食たぶにぎり飯
 伊藤 敬子
 散り時を雨にためらう桜かな
 今関満喜子
 去勢したはずや今年も猫の恋
 魚地 照子
 隅田川桜並木に宴えんた開ける
 鹿子木小夜子
 天よりも地の明るさの代田かな
 川島 通則
 尋ぬれば桜さくら降る御堂みどうかな
 向後 寛
 小学唱歌うたふ姉妹や夏つばめ
 越川せつ子
 葱坊主むぎぼうず覆面弾ふくめんけ針の山
 小松 藤男
 花散るや村の叢祠ほころの力石ちからいし
 佐瀬 輝禿
 グローブを磨く少年夏来る
 椎名万里子
 正座してままごととする子春の風
 市東富美江
 一村を貫く水路今朝の夏
 鈴木とし子
 綿シャツに替えてすつきり立夏かな
 土屋美枝子

万緑のダム湖にしずむ百十戸
 土屋 義昭
 祖父の眉しめじみ見上ぐ松露飯
 戸村 静華
 心地よき風受く畠の立夏かな
 内藤 くに
 紫木蓮風を集めて舞まにけり
 早川 勇
 句作りを老いの杖とし花巡る
 藤田 雅夫

短歌

すじ雲の下をゆつくりちぎれ雲
 夏なつのイントロ奏そうでるような
 越川 義則
 ありがとう今日もなんとか無事でした
 夕ゆふべ吹き眠りに入る
 高梨 キヨ
 ……………
 頭あたまを下くだげて不正詫ふちがたふるも会見が
 再三さんさんなれば冷やかに視る
 青木 秀子
 八年前佐渡に求めし透かし百合
 絶えしと思ひしが芽生えてきたり
 鈴木まさ子
 小一の授業参観の教室に
 ふりむく孫は吾を探せり
 押尾 輝子
 ひよよと鳥の声なるアラーームが
 止めて二度三度と鳴りぬ
 椎名美枝子

抑留中シベリアに死すとう五千人
 全て片仮名に名前書きあり
 浅野 榮子
 つくしんぼの煮物は友の手つくり
 ほろ苦みある春を味はふ
 田崎 尚美
 柿の芽の生え初めたる花鉢は
 幼がいつか蒔きしものらし
 芹川 初子
 荒すさむ風身をとほりゆく目の前に
 白亜の灯台揺るぎなく立つ
 西山満里子
 浜離宮の堀端およぐ二羽の鴨
 浮き藻の間あひを行きつもどりつ
 水須 俊
 春祭りの子ども神輿かみこに飾りたし
 枝垂れの桃の花の色濃き
 加瀬 弘子
 芽吹きたる樹樹の緑の深めるが
 日増しに見ゆる朝戸を開ける
 斉藤つね子

お詫びと訂正

広報5月号17ページ掲載の「文芸・短歌」の記載内容の一部に誤りがありました。
 訂正してお詫び申し上げます。
 誤 携帯電話ケータイが読んでいますと嫁の言ふ
 榎えのの茂みに鶯鳴くを
 押尾 輝子
 正 携帯電話ケータイが読んでいますと嫁の言ふ
 榎えのの茂みに鶯鳴くを
 押尾 輝子

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

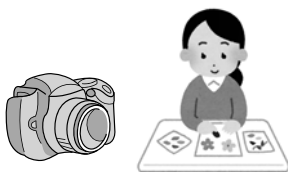
6月 絵手紙ひかりの詩
 7月 写友会

◎文化会館ロビー展

6月 アート押し花クラブ
 7月 短歌会

◎銚子商工信用組合展

6月 展示なし
 7月 アート押し花クラブ



こうほう博物館 99

まさかり 鉞まさかりの様な石器

この写真は、刃が弧状になり基の方が細くなった、磨いて造られた石器である。一見すると石斧の様だが、実際は青銅器の剣を模した石器で、角のある基部が欠けているが、有角石器と呼ばれる弥生時代特有の石器である。これはおそらく権威の象徴として造られたものであろうと言われており、平成十六年に芝崎中島遺跡の発掘調査で出土したもののだが、これ以外に弥生時代のものはない見つけられなかった。なぜかこの有角石器は千葉県でもこの東総地域に単独で多く出土している。また、この石器が造られた時期は弥生時代中頃で、この地域は縄文文化から弥生文化に変わった頃に当たり、

それともその弥生文化が北の山中からと、南の海岸沿いからの両方がぶつかった所に当たる。そのため弥生土器は様々な形、文様のものが出土し、まさに混沌とした様相であった。そのような時、地域の中でなぜこのようなものが生まれ、残されたかは未だに謎である。
 (社会文化課 道澤 明)



▲芝崎中島遺跡出土の有角石器